

第一巻は重要通達事項のみで、巻末に『鎮台日誌』の訂正文が挿入されており、『鎮将府日誌』のもつ性格の一面を示している。第二巻以降は、維新戦争第二期の東北地方での戦闘記録が主体である。

慶応四年七月十七日、江戸を東京と改称する詔勅が出、これに伴って有栖川大総督府宮が鎮台を免ぜられ、三条実美右大臣を鎮将となした。新政府は政務総裁たる鎮将を新設した東京府に在勤せしめ、駿河以东十三ヶ国を支配せしめた。

東京大病院は、この年の七月二十日に医学所に併合され、所屬が鎮台から東京府に変わり、さらに九月十三日より鎮将府に変更された。そして十月十九日から再び東京府に移っている。

『鎮将府日誌』には、細部に及ぶ人事の記録はないが、三職七科制をふまえた組織と考えられる。注目すべき記事としては、誰が、何時、何処で負傷し、浅手か深手かまでを記入してあり、その戦傷兵が「横浜軍陣病院」にどれだけ辿りつけたかは今後の大きな調査課題のひとつである。

一例を示すと、七月十三日の磐城平城の攻防戦で、負傷した薩摩藩の財部与八(浅手)、同小隊長の榊山十兵衛(深手)は、共に小名浜を経て同月二十七日に「横浜軍陣病院」の太田陣屋に入院し、与八は八月二十八日、十兵衛は八月二十四日に死亡している。

また、興味をひく点としては、京都の太政官代にのみ死傷

者報告をした藩、東京の鎮将府のみに報告した藩、両方へ時期を分けて報告している藩に大別される。

このような混乱を生じた原因や、東京大病院の所屬の変遷が、維新政権内部での政治的綱引きや天皇東遷がからみ合う(土佐藩・福岡孝弟の証言他)ものと考えられ、重要な課題としてさらに研究をすすめることとした。

(平成七年九月例会)

陰陽—中国古代医学の枠組み概念、其の一—

家本 誠 一

中国古代医学には陰陽、五行、三才という三つの枠組み概念がある。この三つの枠組みの中に医学のほぼすべての内容が盛り込まれている。故に中国古代医学の究明にはこれらの概念の検討は欠かすことが出来ない。

陰陽の語源的定義

陰は、阜(おか)十云(くも)十今(含、閉じ籠もる)より成る文字で、日の当たらない蔭地を意味する。湿気が籠もって鬱とおしく冷たい。陽は、阜十易(日が昇る)より成る文字で、日の当たる丘を意味する。明るく温かい。即ち陰陽は、語源的には、太陽エネルギーの地上に於ける存在様式を示す言葉である。陽は明るく、温かく、乾いて、活動的な性質を持つ。陰は暗く、冷たく、湿った、安靜的という性質を持つ。

陰陽の素問的定義

陰陽は天地の道なり。万物の綱紀、変化の父母、生殺の本始、神明の府なり(生氣通天論)。万物の綱紀とは分類の基準になると云う意味である。分類の基準としては天地、水火、男女等を分かつ。変化の父母、生殺の本始とは変化推移の動因となることを示す。陰陽の時間的消長は明暗、寒暑の変動の要因となり、昼夜、季節の推移を起動する。生物の世界では成長取蔵の循環を生む。また陰の極より陽、寒の極より熱への変換も主宰する。これを要するに陰陽は天地の法則であり、真理の殿堂である。

生物の機能と形態に於ける陰陽

生体における陰陽は、栄養素、エネルギーの生産、貯蔵、放出、運搬、消費を制御する機構である。陰は生産より放出までを担当し、陽はその消費を担当する(陽は外に在りて陰の使いなり、陰は内に在りて陽の守りなり。素問5)。植物の場合、土の中から水や栄養分を吸収して根や茎に栄養物やエネルギーを貯えるのが陰の仕事である。この栄養物とエネルギーを使って、芽を吹き、双葉を開かせ、茎を伸ばすが陽の働きである(陽は之が正〓征を予え、陰は之が主となる。素問6)。動物においては、飲食物から栄養物とエネルギーを吸収して内蔵(肝、腎)に貯え、必要に応じて放出するまでが陰の仕事であつて、その栄養物とエネルギーを使って知覚、運動、発汗、栄養、体温調節などの仕事をするのが陽の役目である(陰は精を蔵して亟を起こす、陽は外を衛して固めをなすなり。素問5)。

即ち、代謝に於いて、陰は同化的に働き、陽は異化的に働く。陰陽は、現代医学的には、ほぼ自律神経系に相当する。陰は副交感神経、陽は交感神経に対応する。

陰の仕事をする場所が五蔵六府の内蔵である。故にこれを陰と云う。陽の仕事をする場所が頭、四肢、体表である。故にこれを陽と云う。内蔵は陰優位であり、頭部と四肢は陽優位である。人間の自律神経支配の状況は、昼、春夏は交感優位、陽優位で、覚醒の状態で活動的である。夜、秋冬は副交感神経優位、陰優位で安静的で睡眠の時期となる。病気の場合、陽優位では発熱し無汗である(麻黄湯)。陰優位では寒気がし汗が出る(桂枝湯)。

疾病、症候の病理発生における陰陽の関与

肢端紅痛症で手足の末端が火に炙られたように熱く感ずるのは、四肢末端と云う元々陽気が盛んな所に更に陽気が盛んとなり、陰気が少ない為、陽による熱を抑えることが出来ず、ひたすら熱感を覚えるということになる、と説明している。素問における病理の説明は本より陰陽だけで行なっている訳ではないが、重要な要素の一つであることは確かである。

診断に於ける陰陽

診断は脈診、色診、問診によつて行なう。脈には陰陽がある。脈の陰陽には二つの意味がある。一つは脈状によつて病位(浮〓表、沈〓裏)、病理(滑〓風、澹〓痺)、病情(數〓熱、遲〓寒)の判定をする。二つは予後の判定をする。脈に生氣があることを胃腕の陽と云う。死兆を示す脈を真蔵の脈と云う。

これは陰の脈である。これに脈の虚実とを加えれば診断のかなりの部分がカバー出来ることになる。

治療に於ける陰陽

病状に於ける陰陽の虚実、盛虚、有余不足の病理に向けて、薬物の寒熱、補瀉の薬理を対応させる。これが薬物治療の原則である。鍼灸治療も原則的には同様である。その難しさについて傷寒論の傷寒例第三は王叔和の文章を掲げて誤治誤療を厳に戒めている。古人にとつても陰陽虚実の判定は容易なものではなかったことが分かる。

(平成七年五月例会)



紹

介

山本亨介著『種痘医小山肆成の生涯』

嘉永二年(一八四九)夏、モーニツケによって長崎にもたらされた牛痘苗は、蘭方医たちの努力によって全国に普及した。その後明治四年にボードイン苗にかわるまでの間、これが天然痘予防にはたした役割がいかにおきいものであったかはよく知られた事実である。嘉永二年をもって、わが国の牛痘接種法元年とすることについては、大方の承認をえている。

これ以前にわが国でおこなわれた牛痘法については、富士川游をはじめ先人の研究によって、いく人かの先駆者が存在

していたことが知られるようになり、その事蹟についてもわずかではあるが光があてられるようになった。富士川游の「種痘術の祖の私考」(著作集四所収)によれば、長与俊達(肥前)、小山肆成(紀伊)、井上宗端(下総)、中川五郎治(松前)などがそれである。

孫の長与専齋が明治新政府の衛生行政の中で枢要な地位をしめるようになったので、祖父である長与俊達の事蹟はあきらかにされている。

中川五郎治については、松木明知の三〇年にもおよぶ史料探索の結果が数十編の論文として実をむすび、五郎治の系譜のかんりの部分が解明されるにいたった。

しかしその一人、小山肆成についてはあまりに不明の部分がおおきかった。あと数年で明治維新をむかえるという文久二年(一八六二)に肆成が歿し、そして養女雪江、妻と相ついで世をさつたため、肆成の活躍をつたえる文書類が散逸し、墓も無縁になってしまったという。このように史料のとぼしい人物をとりあげて、何とか世にだしたいと願って執筆されたのが本書である。同じ紀州の出身である著者は、肆成が華岡青洲と肩をならべるほどの業績をあげた人物との信念にもとづいて、郷土の偉人にあたたかい眼ざしをそそいでまとめあげた。

著者は天狗太郎のペンネームもつ作家で、昭和三八年朝日新聞の将棋観戦記者を最後に文筆生活にはいった。本書は作家としての著者の筆はこびによって、さすがに丁寧な、よ